



Data

監督・脚本: リュック・ベッソン

出演: サッシャ・ルス / ルーク・エヴァンス / キリアン・マーフィ / ヘレン・ミレン / レラ・アボヴァ / アレクサンドル・ベトロフ / エリック・ゴドン

👁️👁️ みどころ

こりゃ面白い! さすがリュック・ベッソン監督! 『アトミック・ブロンド』(17年)のシャーリーズ・セロン、『レッド・スパロー』(18年)のジェニファー・ローレンスに続いて、シリアスな闘うヒロイン映画が誕生!

「怪人二十面相」はさまざまな顔のとっかえひっかえが「売り」だが、表の顔は美女モデル、裏の顔はKGB(ソ連国家保安委員会)の女スパイ(殺し屋)のアナだって、その見事さは負けていない。

朝鮮半島では目下、金正恩の妹・金与正が韓国に対してものすごい脅かしをかけているが、朝鮮戦争は休戦状態だから、二重スパイも多い。しかし、KGBとCIA(アメリカ中央情報局)の二重スパイなんてあり得るの?

そんなロマンと現実のスパイの世界を、本作でタップリ楽しみたい。



■□■ 闘うヒロイン映画、万歳! ■□■

私はリュック・ベッソン監督の『ニキータ』(90年)、『レオン』(94年)、『LUCY / ルシー』(14年)、『シネマ 33』未掲載)等の、「闘うヒロイン」映画が大好き。また、『フィフス・エレメント』(97年)や『ジャンヌ・ダルク』(99年)も大好きだ。彼は、『レオン』でナタリー・ポートマンを、『ジャンヌ・ダルク』でミラ・ジョボビッチを見出した。近時、『アトミック・ブロンド』(17年)のシャーリーズ・セロン(『シネマ 41』194頁)、『レッド・スパロー』(18年)のジェニファー・ローレンス(『シネマ 41』189頁)等の“最強美女スパイ”が大活躍しているが、本作もその1つだ。

米ソ冷戦時代に始まった『007』シリーズも、第2作『ロシアより愛をこめて』(63年)が最高作とされている。また、リチャード・バートンが主演した『寒い国から帰ったスパイ』(65年)も最高傑作だった。近時は「米ソ冷戦」ではなく、「米中冷戦」に時代が変わっているが、1990年当時のソ連のKGB(ソ連国家保安委員会)とCIA(アメリカ

中央情報局)とのスパイ合戦は？

■□■表の顔は美女モデル！その裏の顔は？■□■

「怪人二十面相」はさまざまなタイプへの変身が得意だが、パリのモデル事務所にスカウトされた大学生のアナ（サッシャ・ルス）だって！モデル事務所の経営者が“商品”であるモデルの女の子に手を付けるのは御法度だが、共同経営者のオレグとアナはいい仲らしい。ところが、何とオレグから、「俺の裏の顔は武器商人だ」と告白されると、アナはトイレに隠していた銃で、容赦なくオレグの頭を撃ち抜いたからビックリ！この美女モデルであるアナの正体は一体ナニ？

それは、KGBの殺し屋だ。3年前、彼女は恋人のピョートル（アレクサンドル・ペトロフ）と“クソみたいな人生”を過ごしていたが、そこに突然アレクセイ・チェンコフ（ルーク・エヴァンス）が現われ、アナをKGBのスパイにするべく、ある勧誘を・・・。

■□■師弟モノの楽しみとアクションの楽しみ■□■

スパイものには「師弟もの」も多い。ロバート・レッドフォードとブラッド・ピットがCIAのスパイの師弟役を演じた『スパイ・ゲーム』（01年）（『シネマ1』23頁）はその典型だが、本作でKGBの優秀な女スパイ（殺し屋）に成長していくアナの上司オルガ役を演じるのは、何と『クイーン』（06年）（『シネマ13』185頁）でエリザベス2世役を演じたベテラン女優ヘレン・ミレン。彼女はデスクワークだけだが、本作ではその冷徹ぶりをじっくり観察したい。

また、『アトミック・ブロンド』ではシャーリーズ・セロンの華麗なアクションがお見事だったが、本作では本職のモデル出身であるサッシャ・ルスの伸びやかな肢体を躍動させた華麗なアクションが随所で登場するので、それもしっかり楽しみたい。

■□■KGBとCIAの二重スパイ！そんなのあり？■□■

平和ボケした日本では、本格的なスパイ映画が流行らないのは当然。ましてや、「二重スパイもの」など脚本すら思い浮かばないはずだ。しかし、金正恩の健康不安がささやかれ、妹・金与正への権限移譲も視野に入れているらしい昨今の朝鮮半島情勢は要注目。そして、米朝関係も緊張状態が増している。1953年に朝鮮戦争は終わったが、それはあくまで“休戦”だから、南北のスパイ合戦はずっと続いているわけだ。したがって、韓国映画では『二重スパイ』（03年）（『シネマ3』74頁）をはじめ、「二重スパイもの」が面白いのは当然だが、ホントに二重スパイっているの？

そう思っていると、本作中盤では何とアナがチェスの勝負でチェックメイトを決めたとたん、KGB長官を射殺したからビックリ！もちろん、これには長官の側に控えていたアレクセイもビックリだが、アナがついでにアレクセイを殺さなかったのは一体なぜ？そして、そもそもKGBの優秀な女スパイ（殺し屋）として順調なキャリアを重ね、オルガやアレクセイからも絶対的な信頼を得ていたアナが、一体なぜCIAの二重スパイとしてKGB長官の殺害を？

■□■随所、随所での種明かしの妙をじっくりと■□■

私は『ハリエツト』（19年）を観るのをやめて、その代わりに『ルース・エドガー』（19年）を観た。それは、ウィキペディア情報によれば、前者は伝記もので平凡な構成になっているのに対し、後者は起伏に富んだドラマになっているためだ。

他方、映画はヒミツとネタの宝庫だから、ラストにすべてのヒミツが明かされるという構成の映画もある。しかし、リュック・ベッソン監督はヒミツとネタが満載の本作では、その節目節目であつと驚く“種明かし”をしてくれるから、なるほど、なるほど……。オルガはアナのちょっとしたミスも常に監視していたが、それでも「なるほど、あれは見落としていたのか！」という形であつと驚く種明かしのストーリーで納得させられることが本作では何度も見せつけられる。しかし、いつアナはKGBとCIAの二重スパイに？

■□■CIAが迫る選択は？提示する条件は？■□■

本作の後半からCIAの捜査官として登場してくるレナード・ミラー（キリアン・マーフィー）は、数年前にモスクワで優秀な部下を多数失ったため、その復讐に執念を燃やしている男という設定だ。ある夜、アナは彼が仕掛けたあるワナにハマってしまったが、そこでレナードが「死か？それとも、寝返りか？」の選択を迫るシークエンスは面白い。日本では来たる6月18日からのプロ野球の開幕がスナリ（？）決まったが、アメリカの大リーグでは選手たちの年俵闘争（？）もあって、開幕の日程や条件が容易に決まらない。要するに、それだけ選手たちの権利意識が強いということだ。しかし、絶体絶命の状況下にあるはずのアナに対してCIAが提示する条件とは？逆に、アナがレナードに対して提示する条件とは？

日本人や韓国人ならなかなかこうはならないだろうが、アメリカ人やロシア人の合理的な選択は如何に？最後に妥結した条件は「1年だけCIAで働くが、その後は自由。そして、ハワイで家を与えられて優雅な生活を保障される」というものだったが、さて、この条件の履行は？

■□■驚愕のラストの成り行きは？■□■

リュック・ベッソンは監督業の他、プロデュース業で『TAXi』シリーズ（97年、00年、03年、07年、18年）、『96時間』シリーズ（08年、12年、14年）、『トランスポーター』シリーズ（02年、05年、08年）もこなしているが、これらは意外に単純なストーリーが多い。それに対して、自ら脚本を書く作品ではオリジナルなものが多く、その想像力の豊かさに感服させられる。しかし、本作ラストは、何とアナが激しいセックスシーンを展開していたKGBのアレクセイとCIAのレナードの2人が対面して座るテーブルの横に現われるという驚愕のシークエンスが登場する。オルガはそれをカメラで監視しながら、いざという時の手はずを整えているから、事態は緊迫の極みだ。

KGBとCIAの二重スパイとしての役割を全うし、双方から命を狙われながら「必ず生き抜く！」と誓ったアナは、今一体何をしようとしているの？そして、その成否は？19

59年生まれのリュック・ベッソン監督、還暦を過ぎて、なお最高！

2020（令和2）年6月19日記